

§ ラスベガス徘徊 第一日

家に帰ってきた。ポケットから出した鍵で、いつも通りドアを開けると、そこには知らない人がいた。壁には警報装置の様な機械が付いていて、家具もすっかり変わっている。戸惑う自分に向かって、見知らぬ男が不法侵入だと抗議してきた。自分が借りていた筈の部屋が、いつの間にか他の人に貸されてしまっているらしい。

妙な夢で目が覚めた。今日、自分はラスベガスへの旅に出る。たかが夢とは言え、後ろ髪を引かれる嫌な始まりだ。

ラスベガスに行く事になったのは、職場の同僚に誘われたからである。自分はラスベガスにもカジノにも思い入れはない。幼い頃に家族旅行でラスベガスに寄った事はあったが、デューンズという豪華なホテルの部屋の記憶が微かに残っているだけだ。その思い出のホテルも今はない。それでも誘いに乗ったのは、どこだろうと海外に行きたかったからである。国内ならば一人旅も構わないが、海外は言葉が通じない事もあって一人で行くのは不安で、行きたいながら行けずにいたので、同僚の誘いは渡りに船だった。悪夢のせいで期待溢れる楽しい気分とは無縁に始まった旅の初日、自分はクリーニング屋に出しっ放しだったシャツを取りに行ったり新聞配達に一時停止の電話をしたり所帯じみた用事を済ませた後、成田空港へ向かう。前回の海外旅行であるニューヨーク

徘徊の時は思い残す事がないように前日の晩に好物の天麩羅を食べていて、今回も昨夜のうちにお気に入りの天麩羅屋に行くつもりだったのだが、帰る間際に急な仕事が入って計画が狂い、吉野家の豚丼になってしまっていた。これで飛行機が落ちたら、泣くに泣けない。事故死より、そんな事が気になっていた自分は、集合時間前に昼食の為に早めに待ち合わせたM氏と共に入った店で迷わず天ざるうどんを注文した。本格的な天麩羅ではないが、豚丼より遙かにましだ。幼少からの旧友で、かつてニューヨークで生活をともにしたヌイグルミのスヌーピーの赤い首輪も、ニューヨーク徘徊に続いて鞆に付けてきたし、これでもう心配する事はない。別に何の根拠にもならないが。

今回の旅の間はホビットにエルフにドワーフに、ではないが、職場の同僚である男性のK○氏とI君、女性のM氏とT氏、それに自分の五人である。今回の旅の言いだしっぺであるK○氏は今度でラスベガス訪問は六度目というツワモノだ。間違えないでほしいがキワモノではなくツワモノだ。とにかく、その経験豊富さで半ば添乗員の如き心強い存在がいるせい、あれだけ海外旅行に対して慎重で神経質な自分が、国内旅行に勝るとも劣らないくらいに緊張感も実感もない。空港のチェックで行き先はどこかと訊かれ、「最終的にはラスベガスですけど、乗り継ぎはどこだったか：：」と思いつけずに手荷物の鞆から日程表を取り出して漸く答えるという始末だ。それで怪しまれたのだらう、預ける方の鞆

をあらゆるポケットの中から替えの下着を入れたビニール袋の中まで全て調べられた。文句を言つつもりはない。自業自得だ。

飛行機に乗り込み、途中、サンフランシスコでの乗り継ぎを含めれば約十時間の旅。同僚達は座席の前に設置された小型画面でゲームをしたり映画を観たり。自分は近すぎ小さすぎの画面を見るのは疲れるので、ひたすら寝に努める。時差の影響を小さくする為には、寝続けるか起き続けるかだ。行きで起き続けは疲労困憊しそうだし、ベガスに着いても時間が早くホテルにチェックインできないかもしれないので、そのまま遊びに行くとK.O.氏に言われていたので、眠れなくても寝る事にした。結局、眠くないので眠れないし、隣でぐっすり寝入っているI君に寄りかかられるし、快適とは言い難い状態だったにも関わらず、意外と前回のニューヨーク行きの飛行機ほどには疲れなかった。

サンフランシスコでの入国審査では、折角、向こうの職員が日本語で質問してくれているのに英語で答え続ける馬鹿な真似をしつつ、以前より厳しくなった審査で両手人差し指の指紋採取と顔写真の撮影を終えて無事に入国した。ラスベガス行きの飛行機を待つ間、I君が言う。出入国カードの「あなたは麻薬常習者ですか」という質問に、つい「はい」の欄にチェックしてしまつて後から気付いて慌てて直したと。おいおい、君は麻薬常習者だったのか。そのまま気付かずに提出したら、どうなっていた事やら。乗り継ぎ空港も知らずに海外に行くこととしてた自分も問題だが、

大事な書類の文章を読まずに答えちまうのも相当に問題だ。

国内線の飛行機は粉砂糖の様な雲海の上を飛び、いつしか雪を散らした山並みが眼下に見え始めた。日本とは違う粗い風景だ。

途中、山間に開けた土地に湖水には見えない妙に白い円形の大きな土地があつた。暫くして幾何学的に整然と家と道路が配された街が現れ、その先の狭い地域に幾つかの高層ビルが建っている一角が見えた。目的地のラスベガスだ。意外に小さく見えるのは気のせいだ。到着が日の落ちる前の時間だからか、ニューヨークの時とは随分印象が違う。

マッカン国際空港に着くと、出口で日本人女性が自分達の利用しているツアーの表示を持って立っていた。出迎えに来てくれた現地のネバダ観光の職員、長久保貴代さんだ。目の化粧が強く印象的な彼女は、小柄な体に黒のスーツでピシッとキメ、おのぼりさんな自分を颯爽と案内していく。途中、携帯電話だかトランシーバーだかを顔の斜め前に掲げて話しながら歩いていく姿が何ともかっこいい。

荷物受け取りの場所まで案内され、ベルトコンベア上の自分の荷物を見つけて取り出せば、すかさず長久保さんから一言。「それだけですか？ 身軽ですね」。必要最低限の物しか持たない自分にとって国内外限らず旅行の度に仲間にかかとと言われる台詞だが、旅行会社の人にまで言われたのは初めてだ。海外旅行で定番のスリッパではなく、普通に国内移動用の布製肩掛け鞆だからか。

でも、中に入れる物が単なる着替えだけなら、大荷物になる理由もない。何となく旅慣れてる外観で嬉しいし、現実、この方がずっと楽でもある。

車に乗せられ、他のツアー客と共にホテルへ向かった。彼女は頻りにラスベガスの説明をしてくれるが、いかんせん日本人はこういう時の反応が鈍く、皆、あまり返事をしない。可哀想になつて、と言つより、単に女の子に弱い自分ではできるだけ彼女の方を見て反応する。ツアー客は全てが同じホテルに泊まる訳ではないので、次々、夫々のホテルに下ろされていく。自分達が泊まるインペリアルパレスが最後だ。長久保さんが流暢な英語でチェックインの手続きを済ませてくれる。幸い、チェックイン前の時刻ながらも部屋は既に空いていて入室できた。帰国子女でありながら既に英語を完全に忘れ去っている自分は、長久保さんの仕事ぶりに見惚れながらも、自分が情けなくなる。いかにもバリバリのビジネスマンが英語を話しているのより、明らかに自分より年下の女の子が英語を話している方がショックは大きい。その後、ホテル内の一角に座つて彼女からの説明を受けた。元来、行き当たりばつたりの徘徊の旅人の上、今回は添乗員同僚も一緒の自分、あまり説明が耳に入らぬまま、長久保さんの小さな顔やらネイルアートが施された指やら見ている。失礼な言い方をすれば、所謂、美人ではないが、明るくて気さくで、くしゃっと満面の笑顔を見せた時が可愛らしい。何となく子犬みたいな魅力を持った人だ。

彼女は、自分がK.O氏からも聞かされていたラスベガスの名物ホテルや無料のショーだけでなく、夜のストリップショーから近郊の自然である「デスバレー国立公園まで様々なものを薦めてくれる。ストリップショーはともかく、『スターウォーズ』の撮影にも利用されたらしい塩の大平原を有するデスバレーに少し心惹かれた。どうやら、機上から見えた巨大な白い円はデスバレーだったらしい。一通りの説明を受け、エレベーターまでの案内を受けて、自分達は長久保さんと別れた。エレベーターの扉が閉まるまで笑顔で挨拶してくれた長久保さんを、エレベーターの扉が閉まるまで自分が見つめていたのと言つてもいい。何を隠そう自分は旅よりも女の子が大好きなのだ。我ながらしょうもないオッサンだと思う。

ラスベガスのホテルは宿泊客がなるべく部屋から出てカジノへ向かうように、客室内の設備は良くないと聞いていた。だが、インペリアルパレスは、覚悟していたほど酷くもない。勿論、高級ホテルの美しさやら設備の充実さはないが、他の観光客ならいざ知らず、一人旅でビジネスホテルを使つたりする自分から見れば、ベッド、風呂、トイレ、テレビがあれば十分だ。冷蔵庫やミニバーは国内旅行でも殆ど使わないので、なくても全く困らない。世の中、上を見ればきりが無いが、下を見て足るを知られば、結構、楽な気分になれる。高級な部屋で寛ぎたいだけなら、ベガスに来る必要もない。

荷物整理をした後、K.O.氏の案内で早速、街へ繰り出す。ギャンプラーなK.O.氏の事だから、いきなりカジノに行くかと思えば、無難に名物ホテル巡りから始まった。ラスベガスのホテルは一般のホテルと違い、それ自体がテーマパークの如き観光名所となっている。

ベネチアンの正面玄関の天井にはイタリヤ風のフレスコ画の複製が描かれ、ホテル二階のグラランド・キャナル・ショッピングでは建物内に運河が流れてゴンドラが行き交う。ただ、時季的に中国の旧正月を意識しているらしくホテル前面に漢字の垂れ幕が掲げられているのが、少々、印象を壊してしまっている。一方、ミラージユの正面玄関には熱帯雨林が広がり、ホテル内にはよく肥えたホワイトタイガーが飼われていた。その他、古代ローマ遺跡の様な外観のショッピング・モール、フォーラムショッピングも訪れる。ここを模してお台場のヴィーナスフォートが造られたという話も納得の、まるで同じ雰囲気だ。違うのは規模の大きさと言葉くらい。ヴィーナスフォートの独創性のなさと言ったらない。一番奥でアトランティスという無料アトラクションを見た。神々を表した三体のロボットが火と水の戦いを繰り広げるといった内容だ。ロボットが持つ剣に本物の火がついたりするものの動きは緩慢で、いまいち盛り上がらない。だが、無料で行われている事を考えれば大したものだ。日本の繁華街の無料アトラクションと言えば、からくり時計くらいがせいぜいだろう。その後、高級ホテ

ルのベラッジオの大きな池で行われる有名な噴水ショーも見た。音楽に合わせ、コンピュータで制御された噴水が様々な動きを見せる。ただ、事前にラスベガス経験者の人々から何かと話を聞かされすぎていたせいか、これもいまいち感動しない。

夜になって、T.I.というホテルが行っている無料ショー、T.I.の「セイレーン」を見に行った。大人気なので、時間ギリギリに行くのと良い場所が取れないらしく、自分達はかなり早めに行って一番前の真ん中の位置を占めた。ショーの内容は、女性達が演じる海の精霊セイレーンの船にやってきた一人の海賊の男性を巡って、セイレーンの船と海賊船が戦うというもの。最後は、男女入り混じっての踊りになる。冬の夜にも関わらず、女性は下着同然の露出度の高い衣装で踊り、男性は上半身裸で水の中に飛び込んだりする。多くの観客はセクシーな衣装や炎の演出に驚いていた様子だが、あそこまであつげらかんと野外で肌を露出して踊られるとセクシーさは薄れてしまうし、炎のロック・バンドであるラムシユタインが自分の体に火をつけて歌うライブを体験している自分には、ちょっとやそつとの炎では、大して驚かない。こんなものかといった感で終わる。

K.O.氏やその他のラスベガス経験者から事前に褒め言葉を聞きすぎて期待過剰になっていたせいか、性格的に感動のハードルが高いせいか、多分、本当は凄い筈の物事が殆ど想定範囲内になっ

映画も旅行も事前に知りすぎていると、本番が事前情報の確認だけみたいになってしまつて純粋な感動に結びつかない気がする。

旅の醍醐味は、その場に行つて初めて知る何かだ。観光云々とはもかく、午後、街を歩いていて感じたのは、有色人種が観光客に少なく、清掃等の低賃金労働者に多い事や、観光客に車椅子利用者と太った人が多い事だった。アメリカという国で誰が金を持つていて、どう障害者が扱われ、いかに不健康な食いすぎが多いかが分かる。人種の問題は別として、日本の観光地で車椅子利用者を見る事は少ないし、太った人もそこまで多くない。アメリカの良い所と悪い所を見た気がする。

「T.I.のセイレーン」が終わつた後、自分達は同じT.I.の中にあるバイキング形式のレストラン「トレジャー・アイランド・パフェ」でベガス最初の食事を取つた。今やベガス名物ともなつてゐるらしいパフェは、殆どのホテルが導入しているとか。大食漢のアメリカ人ならばともかく、少食の自分は食べ放題のバイキング形式は特段に魅力を感じない。色々食べられるのは良いが、何せ予想通りアメリカの料理は大味だ。不満を言っているのではない。大味と量こそアメリカ料理の特徴で、その地の特徴あるものを食べてこそ、来た意味もあるのだ。海外に行つてまで日本食を食べたがる人の気持ちは、自分には理解できない。そんな自分が楽しみにしていた事の一つにアメリカ特有の甘いデザートがある。しかし、今回のパフェで選んだエクレアとフルーツタルトは普通

に甘い程度だった。やはり王道のチョコレート・ケーキでない駄目らしい。次は挑戦しようと思つて誓つた。

今夜の締め、ウインというホテルのカジノでK.O.氏に教わりながら皆でキノに挑戦する。キノとは、一〜八十の中から好きな数字を選び、当選番号二十個の中で何個当たつたかを楽しむミニロトの様なゲームだ。キノラウンジと呼ばれる場所で、ゆつたりした椅子に座り、頭も使わずに小額で遊べるのが魅力のゲームだ。自分達はカクテルウェイトレスに持つてきてもらった飲み物を飲みながら、一回一ドルで五回程度賭けた。数字を五個選んだ場合は、三個当たれば元金が戻ってくる。某女性の名前に因んだ数字を選び続けた自分が三回目くらいで三個当たり、その後K.O.氏、I君も三個当たつたが、皆、プラスにまではならずじまい。

長旅の疲れもあつた自分達は、少し早めに部屋に戻つてベッドに入った。

こうして、セイレーンのセクシー衣装より、長久保さんばかりが印象に残つたラスベガスの第一日は終わった。

\$ ラスベガス徘徊 第二日

朝、文字通りの鈍行バス、ストリッププロローに乗つてヒルトンのパフェへ。ベガスに数あるホテルの数あるパフェの中で、わざわざ少し離れたここに来たのは、我らが観光案内人K.O.氏曰く、

シャンパンが飲み放題だから。朝からアルコールかという突っ込みを突き抜けて、朝から飲み放題である。話によると他のパフェもアルコールはあるが、飲み放題はこくらいらしい。という訳で、皆、朝からシャンパン飲みつつ食事。飲み放題だからと、二杯、三杯と持つてくる。元々、晩酌も滅多にしない自分は朝から飲む事にさえ違和感があるのだが、折角、無料だし、旅先だからと一杯だけ飲むつもりでいた。だが、そうは問屋が卸さない。飲み始めたら止まらない、訳ではなく、止めてくれないのだ。ある事か旅の仲間達が、各々、自分の二杯目を取りに行く時に余計な気遣いをして自分の分まで持つてくる。K.O.氏を初め、I君、M氏と続き、結局、計四杯。幸い、唯一、まともな神経の持ち主でいてくれたT氏が持つてこなかったので、五杯に突入せずに済んだものの、相変わらず「他称」飲める人のイメージは不変のまま、持つてこられたものを全て飲み干してしまった。飲み干した挙句に大して酔いもしないから、いつまで経ってもイメチェンできないとは分かっているのだが。その後、昨晚、食べなかつたチヨコレート・ケーキに挑戦する。朝からシャンパン四杯に加えてケーキがよ、と突っ込みたくなるどころだが、シャンパンはともかく、アメリカに来たら甘いケーキを食べずに帰る訳にはいかないのだ。しかし、またもや、ケーキは期待したほどには甘くなかつた。どうも食事場所が比較的、高級だからか、味が上品らしい。激甘ケーキへの挑戦は、またもや延期となる。

朝食とは言い難い朝食を終えてホテルに戻り、荷物の用意をしから、K.O.氏の案内でラスベガス・プレミアム・アウトレットへ。所謂、日本人特有の買い物尽くしである。と言っても、別にK.O.氏がブランド好きなのは。彼は日本人の割には大柄で日本ではサイズの合う服や靴が手に入りやすく、アメリカに来ると常に出しをするらしい。一方、ブランドに興味もなければ、限りなくSに近いM(サイズの話、念の為)である小柄の自分も、かつてニューヨーク徘徊の時に自分の土産用に子供服を買ったくらいなので、服も靴も買う気はない。皆、興味のある物が違つので、最後の集合場所だけ決めてアウトレット内で自由行動とした。最初から殆ど買う気なしに冷やかし専門の気分の自分は、ただただぶらぶら歩くばかり。こう書くと、暇でつまらなそうに思えるが、そうではない。十分に楽しんでる。日本での旅でも、いつも似た様なものだ。入る店と言えば、姪のお土産探しを兼ねての玩具屋、単なる興味で台所用品等の雑貨屋ばかり。服の店には全く入らない。玩具屋にポケモンやらドラゴンボールやら日本のキャラ商品が予想以上に多いのに驚き、例によってバットマン関連グッズに年甲斐もなく惹かれたりする。ただ、どうやら現地ではバットマンより相棒ロビンらティーン・タイタンズが今は旬らしく、バットマンは少ない。結局、手を入れて動かせるクッキーモンスターのぬいぐるみとボールペンにバイク・ゲームが付いた玩具を姪のお土産に買った。雑貨屋では、電気ショック式蠅叩き

に感心しつつも、荷物にしてまで買おうという気になるものもな
く通り過ぎた。バットマンの原書コミックが欲しい自分はアウト
レット唯一の本屋に入る。だが、パルプ・コミックは置いていな
かった。英語力は乏しいのに何となく書棚を見ていて、或る本が
目につく。『American Fuji』『ライジング・サン』や『SAYURI』
を彷彿とさせるアメリカ製日本小説だろうか。手に取って裏表紙
の粗筋を読んでもみると、どうやら来日したアメリカ人を主人公に
したサスペンスものらしい。試しに頁を開いて数行読んでみると、
何とか大意は掴める。空いた時間を潰すのに洋書を読むのも悪く
ない。自分は、それを買って店を出た。

天気は良好。しかも、場所がアメリカなので、アウトレット内
に流れている音楽が自分の趣味に合う。日本にいと、浜崎あゆ
みや大塚愛を聞かされて腹が立ってきたりするが、ここで流れる
のは、REM、フィル・コリンズ、リンキン・パーク、ミシエル・
ブランチ等、素晴らしいラインナップだ。

そもそも、面白い物が趣味でない自分は早々と用が済んで、待ち
合わせ場所のフードコートに来てしまふ。飲み食いせず待って
いるのも何かと考えていたら、腹が減ってきた。少食にも拘らず
朝から食べ放題に飲み放題だったのに、我ながら意外に元気な胃
袋だ。悩んだ挙句、ピザを買った。アメリカと言えば、ピザだ。
へなちょこな日本のピザはピザじゃない。ただ、アメリカのピザ
は大きい。一人分が思いきり大皿からはみ出す大きさだ。無謀だ

ったかと少しばかり後悔しつつ、仲間が来るのを待ちながら黙々
とピザを食す。暫くすると仲間がやって来た。ピザにかぶりつい
ている自分に、どこか呆れた視線が感じられなくもないが、深く
追及はしない。

結局、朝からシャンパン四杯、チョコレート・ケーキにピザと、
飲みまくり食べまくる自分がピザを平らげるのを待って、皆でホ
テルへ戻った。買い込んだ品物を部屋で整理した後、再び、街に
繰り出す。ホテルのアラジンの一階にあるショッピング・モール、
デザートパッセージの奥でちやちや「雷雨」のアトラクションを
見たり、ABCストアで職場へのお土産候補を物色したりした後、
バスに乗って、ベガスの北にあるフリーモントストリートへ向か
う。

フリーモントストリートは古くからの繁華街だが、今ではアー
ケードの屋根に様々な映像を流す光の祭典が、ラスベガス有数の
ショーとして知られている。その凄さについては、ベガス経験者
の同僚からビデオ映像と共に随分と聞かされていた。一時間に一
回のショーが始まるまでの間、歩道でスプレーを使った絵を描く
人を見物したりする。いざ、ショーが始まる時間が近付くと、通
りの照明が徐々に消え始め、長さ四百五十メートルのアーチ型の
屋根に映像が音楽に合わせて流れ始めた。飛行機やら馬やら魚や
ら幾何学模様やら何やら色々。何となく書き方に感動が感じられ
ないが、実は感動できなかつたのだ。ベラッジオの噴水と同様、

事前に情報を聞きすぎてビデオ映像まで見てしまっていたので、意外性の欠片もない。アーケードの屋根の幅も長さもビデオ映像だと画面に入りきらないが、人間の視界だと切れ目が端に入るの、いまいち物足りない。豪華な文明に慣れきったせい、この程度の規模だと、既に予想の範囲内になってしまふのだ。つくづく、損な性格だと思つ。だからと言つて、フリーモントが面白くなかつたかと言え、そうではない。自分が楽しんだのは、例によつて別の事ばかりだつた。

ショーを待つ間、この界限では高級感のあるホテル、ゴールデンナゲットにトイレに行く為に入つたついで、このホテルにあるという重さ二十七・七キロの世界最大の金塊を見ようと、男三人でホテルの中を歩き回るのが見つからない。他の二人は諦めかけていたが、おめおめ帰るのは癪に障る自分は、下手な英語で場所を訊く事にした。でも、他の二人にあまり聞かれたくもない。それに、どうせ訊くなら、美人のカクテル・ウェイトレスに訊きたかつた。そこで、ぶらぶらしながら他の二人と距離を取りつつ、好みのウェイトレスを探す。暫くして、スロットの一角に立つスラツとしたスタイルがモデルの様なウェイトレスを見つけて思いきつて声をかけた。「へい、彼女、僕とお茶しない？」などは、勿論、言わない。「ちよつとお訊きしますが、このホテルの有名な金はどこですか？」。通じたらしく、「ゴールデンナゲットの事ね」と言われ、途中まで親切に案内してくれた。彼女に礼を言つた後、

二人を呼ぶ。ガイドブックには売りの如く書かれていた金塊だが、いざ、現地ではホテルの端の方に大して目立つ工夫もなく展示されていた。人の頭の大ききくらいある金塊だが、見に来ている客は自分達くらいだ。他の観光客はカジノに熱中している。ガラスケースの中の大金より、今、目の前の金を増やす方が大事なかもしれない。

その他、路上に停めたトラックの上に赤いピアノを乗せたピアノリストが弾く『ライナス&ルーシー』に聴き入ったり、サククス・ブレイヤーに新婚夫婦の聴衆が飛び入りしてダンスを始めたり、現地のその夜にしか味わえない楽しみを堪能する。自分としては、コンピューター制御された映像よりも、この方が旅の醍醐味だと思つ。

映像のショーは毎回、中身が違つるので、間を置いてもう一回観た後、ゴールデンナゲットの傍でタクシーに乗り、次なる名所、ストラトスフィア・タワーへ。タクシーの運転手は陽気に喋りまくり、それ自体は構わないのだが、「日本人の女の子を買うのには幾らだ？」と冗談交じりに途轍もない事を口走る。これには答えられない。同乗の仲間の女性二人は意味が分かつているのかいいのかわからなかった。

ストラトスフィア・タワーは地上二百六十一メートルの高さに屋内展望台があるが、売りはそれだけではない。更にその上、地上二百八十メートルから発射する絶叫マシーン、ビッグシヨット

があるのだ。案内人K○氏の勧めに皆、渋る。唯一、折角、来たからには乗るしかないと云うのは自分一人。特別、絶叫マシーンが好きでもないし、乗ってみれば、怖さで漏らしたり気絶したりしてしまうかもしれないが、試さないのもつまらない。結局、既に経験しているK○氏と、固辞するT氏を除いた、自分とM氏とI君の三人で乗る事に。下で切符を買い、セキユリティ・チエックを受けてから、エレベーターへ。そこで、先に行つた自分の後に、他の仲間がついてこない。何をしているのやらと思いつつ、同じくエレベーターを待つアメリカ人の男性一人と女性二人の三人組に声をかけられる。互いに自己紹介。向こうは、ルービンにレイチェルとノーマだ。一方、自分が名乗ると向こうは上手く発音できずにいた。日本人の名前はアメリカ人には呼びにくい。エレベーターが来て、先ずは百八階の展望台へ。初日にネバダ観光の長久保さんが言っていたのも納得の絶景だ。一面、美しく輝く夜景が広がっている。これだけ高くから夜に見ると、汚い所は全て見えず、ただただ光り輝く街だ。正に一見の価値あり。

展望台で仲間と再会し、そして、満を持してビッグショットへ。漏らすのが心配なので、一応、事前に便所に行つてから、専用エレベーターで百十二階へ。地上二百八十メートルの夜風が顔に当たる。気持ちいい。前の客が乗るのを見物。アメリカ人は陽気で動き出す前から絶叫している。ドーンと打ち上げられ、一回で下りてくる訳ではなく、少し下がって、また上がる。それが三回繰

り返される。何やら落ち着かない。

遂に、自分達の番が回つてきた。椅子に乗り、夜景を正面に見る。次の客として待っているアメリカ人が自分達を囁し立てる。お馬鹿な自分は調子に乗って、それに答えて叫ぶ。ライブと同じノリだ。ここでおとなしくしていても仕方ない。

発射！ 勢いで顔が下に向いてしまふ。グーンと床が遠ざかり、止まつて顔を正面に向けた。夜景だ。怖くない。そして、落下。無重量に近い状態で椅子の中で身体が妙に浮き上がる。続いて、また上昇。叫ぶ。怖いからではない。ただ、楽しんでた。考えてみれば、既に発射前から地上二百八十メートルに来ているので、そこから五十メートルくらい上がったところで、今更、五十歩百歩だ。大して差はない。当初の心配をよそに全く恐怖もなく、ビッグショットを終えた自分は、降りてくるなり例のアメリカ人らに「ワンダフォー！」と叫び、笑いを取つた。下で待っていたK○氏に「もう二度と乗りたくないでしょ？」と訊かれて頷く他の二人を別に自分は一人答える。「また乗りたい！」。どうやら、自分は絶叫マシーン好きかもしれない。

ラスベガス名所を巡る夜を終え、自分達は再びバスに乗つて中心部へ帰つてきた。夕食を食べに行くという仲間達に対して、ピザを余計に食べて未だに腹のすかない自分は一日一食状態で別行動する。ろくな当てもなく、ただふらふらと周辺を歩き回り、宿泊ホテルのインペリアルパレスで少しばかりスロットマシーンに

金を吸い取られると、売店でお気に入りのチョコバー、ミルク・ウエイを買って部屋に戻り、就寝したのだった。

こうして、買い物と大道芸、そして、絶叫マシーンで締めたらスベガスの第二日は終わった。

\$ ラスベガス徘徊 第三日

今日から個人別の行動へ。と言っても、他の四人は我らが観光案内人K.O.氏の提案により、キャビア食べ放題の高級カフェへ。昨日のシャンパン飲み放題と言い、全くよく飲みよく喰らう同僚達だ。少食でキャビアに思い入れもなく、量でも味でも元を取れそうにない自分は唯一人、キャビア食べ放題に加わらない事を決意した次第だ。

実は予習の為にガイドブックを見た時から興味を持っていた場所があった。カジノでもショーでもない。

ハードロック・カフェである。

音楽狂の兄の影響を受けてKISSやプリンスを聴き始め、次第にそこを突き抜けてニン・イン・イン・ネイルズを敬愛するほどになった洋楽ロック好きの自分としては、かの有名なハードロックの殿堂があると知りながら、無視する訳にはいかなかった。ハードロック・カフェはラスベガスの中心街からは二キロばかり離れている。ガイドによると、途中の道は「夜間は歩かない。」

と注意書きされ、無料シャトルバスを紹介していた。考える。バスは嫌いだ。「夜間は歩かない」とは、つまり、「昼間なら歩いてもいい」という事だ。歩く事にした。

遅い朝、宿泊先のインペリアルパレスを出て、歩き始める。中心街の大通りであるストリップを南下した。ここまでは、多くの歩行者がいるので殆ど問題ない。ベラッジオやらアラジンやら幾つものホテルの前を通り過ぎ、ハーレー・ダビッドソン・カフェが見える交差点で東に曲がってハーモン・アベニューへ入った。そこから様子は一気に変わる。歩行者は殆どなく、視界に入る人影は自分を除いて一人いるかどうかだ。元来、自分の前を遮るように人が歩いているのも、自分の後を尾行するように人が歩いているのも気に食わない、神経質な自分は、日本国内での徘徊であれば、誰もいない道が嬉しくて堪らない。しかし、場所がアメリカでは事情が違う。「夜間は歩かない」と注意される道だ。真つ昼間とは言え、呑気ではいられない気がする。

周りを警戒して歩く。車道からは距離を保ち、横道や建物の出入口の前を通る時は気を引き締める。車社会のアメリカゆえか、大都会であるラスベガスでさえ大通りを外れると、ここまで歩行者はいないものなのか。横を車が走り過ぎていく。とほと歩いている自分が何やら酷く愚かしく思えなくもない。

暫く歩いていると、前から一人の大きな黒人男性が歩いてきた。少し怖い。人種差別をするつもりはないが、この界限で犯罪に手

を染めるのは、裕福な白人層よりも貧しい黒人層だろう。しかも、体格の良さが日本人とは比較にならない。緊張する。少しづつ距離が縮む。自分の心臓も縮んでくる。肩に力が入り、腹筋が締まる。目を合わせず、しかし、目を逸らせもせず、自然さを装う。

すれ違った。

何も起きなかった。それでも、自分は暫く警戒度を緩めず、背後を気にしたまま歩く。やはり、何も起きなかった。

更に歩いていくと、道が細くなり、その向こうから親子連れらしき二人組が歩いてきた。白人男性と小さな男の子。普通に考えれば、危険はない。だが、日本の普通がアメリカの普通とは限らない。そもそも、日本の普通でさえ最近は何となく怪しくなっている。小さな子供で油断させて、という展開もあり得た。再び警戒しつつ、距離を縮めていく。先程の大きな黒人男性よりは抵抗できそうな体格だ。しかし、銃を持っていたら、どうしようもない。

白人男性の手が動いた。

男の子の手を握り、彼の方へ体を寄せる。

すれ違った。

やはり何も起きなかった。勿論、起きては困るが。どうやら、今回は相手側の方が警戒したらしい。人通りの少ない道を一人で歩いてくるジージャン姿のアジア系の男に、彼は警戒して愛する息子の手を握って引き寄せたのだろう。

シャトルバスを使えば避けられた無用な心配ではある。だが、

後悔はなかった。安心で賑やかな場所だけがラスベガスではない。この街の別の空気を味わえた。

誰も感心しなければ楽しいとも思わない道歩きの後、目の前にハードロック・カフェの象徴とも言つべき巨大なギターが見えてきた。多分、何事も起きない筈だと踏んではいたものの、やはり無事に着くと、ホッとする。

とにかく、カフェで腹拵えだ。どこでもアメリカの食事は量が多いのは分かっていたので、美味しく食べる為に朝食を抜いて、ここまで歩いてきた。店に入ると、予想していたより小さく、客も少ない。どうもベガスに来る前からの思い込みが激しく、どこに来て、小さく見えてしまう。客が少ないのは、昼間だからだろう。

好みのタイプの小柄で綺麗な女性店員が案内してくれた。中央のカウンター席が、それを囲んで配された小さなテーブル席が訊かれ、テーブル席にする。女性店員が何か言う。聞き取れない。もう一度言われる。多分、歓迎の挨拶だと思っが、聞き取れない。

「Sorry」。思わず口走ると、彼女は笑顔で「OK」と言っ、自分の持ち場へ戻っていった。情けない。推測するに単語としては相当に簡単なものの筈だ。しかし、それが聞き取れないので反応できず、挙句の果て、日本人の典型らしく謝ってしまうとは。何が分からないが、最初に口を出る言葉が「Sorry」になっしまっ悪い癖が自分にはあるらしい。意味もなく「ごめん」や「す

「いません」を口にする事に激しく抵抗を覚える自分としては、自己嫌悪も甚だしい。

注文を取りに来たのは、カウンターの前にいた背の高い男性店員だ。気を取り直して、ビールとハンバーガーを注文する。昨日のシャンパンと言い、昼間からアルコールもいかなものかと思っただけ、暫く歩いてきて喉が渇いた上に、店の雰囲気は飲みたいたい気分させた。幸い、ビール一杯程度で酔う体質ではない。

店内に所狭しと飾られたロック・スターゆかりの品々は噂通り、相当なものだ。ブライアン・ウィルソンのギター、プリンスやマドンナの衣装、マイケル・ジャクソンの靴、等々。壁のテレビ画面にはMTVか、クイーンやフィル・コリンズの映像が流れている。

店の雰囲気を堪能しつつ、ビールを飲み、ハンバーガーを食べる。やはり緊張していたのだろう。皿の端に置かれていたレタスとトマトの存在に気付かず、プレーン状態でハンバーガーを食べてしまい、途中になって、挟み忘れたのに気付いた。お好みで挟むらしく、他の客も挟んでいない人もいたので、さほど問題でもないが、店内の客でアジア系は自分だけだ。心細くもあったが、どこに行っても日本人と出くわす観光地では異国情緒を味わえないので、この方が嬉しくもある。すっかり気を良くした自分は、更にアイスクリームを注文した。細長いグラスに入れられたそれは、思ったよりも甘さも控えめで美味しい。幸せ気分。

ところが、会計の段階で少しばかり問題が発生した。頼んでもいないピア・グラスを店員が持ってきたのだ。指摘すると、レシートを示して笑顔で何か説明してくる。持ってきたのがガラクタだったり、金額を馬鹿高くされたりしているならば、抗議もする。しかし、持ってきたのは「ハードロック・カフェ」のロゴの下にラスベガスと書かれたオリジナルのピア・グラスだ。先程まで自分がビールを飲んで来たグラスと同じ物である。会計金額も不当ではない。自分用の土産と考えても、納得できる品物だ。そう思った自分は、そのまま受け取り、その店員に店の中を見学させてほしいと頼んで、自分の席からは見えなかった品々を見て回った。ついでに横にあるロゴ・ショップで帽子とブレスレットを買い、カフェを出た。

次は隣の世界初のロックンロール・ホテル&カジノ、ハードロック・ホテルへ。そこに置かれた品々はカフェに勝るとも劣らない物ばかりだ。ブリトニー・スピアーズやエルトン・ジョンの衣装、サンタナやエリック・クラプトンのギター、等々。一回りした後、このまま帰るのは勿体ない気がして、カジノでスロットマシンの前に座った。儲けるつもりはない。ただ、この雰囲気をゆっくり楽しみたかった。カクテル・ウェイトレスにオレンジジュースを買い、ちびちび低額でスロットを回す。金は吸い込まれていく。それを余り気にもせず、ホテルのBGMにストーン・テンプル・パイロッツが、そして、我が敬愛するニン・インチ・

ネイルズまでも使われているのに嬉しくなる。ここまでお気に入り
の音楽を自宅以外の場所で無料で聴けたのは初めてかもしれない。
欲のなさが良かったのか、吸い込まれ続けていた金は、一度、
四十倍に当たって一挙に負けを取り戻した。ここが潮時かと思ひ、
換金してホテルを出る。

帰りは歩かず、タクシーに乗って中心街にあるショッピング・
モールのデザートパッセージの前へ。いつもの徘徊旅行の際は職
場の誰にも言わずに出かける事しているので土産を買う必要は
ないが、今回は同僚と一緒にだから、そうもいかない。昨日、K
氏に連れられて物色したABCストアで、いかにも日本人向けの
サイコロの付いた携帯ストラップを買って済ませる。特に親しく
もないが赤の他人でもない人に土産を買うのは苦手だ。ふざけず
ぎても真面目すぎてもいけない。大体、自分が貰う側に回った土
産は数多くあるのに全く記憶になく、その程度の事に折角の旅先
で頭を悩ませねばならない事が、妙に馬鹿らしい気もする。

ともかくノルマを果たして肩の荷が下りた自分は、デザートパ
ッセージの入口で似顔絵を描いてもらう事にした。土産物屋の品
物にはあまり興味が湧かないが、似顔絵は間違いなく現地に行っ
た本人しか手に入れない世界唯一の物だ。しかも、絵描きと
のコミュニケーションも味わえる。実は昨日も同じ絵描きがここ
において、ストラトスフィア・タワーの展望台でも綺麗な白人女性
の絵描きがいて気になっていたのだが、連れの都合もあって遠慮

して口に出さなかった。一人になってしまえば、何でもありだ。
丸々と太った愛想いい笑顔の白人女性の絵描きに声をかけ、前に
座る。描き始めると、彼女が言った。「もつと笑顔で」。元来、意
図的に表情を出すまいと努めてきた自分は、あからさまな大きな
笑顔を作る事が苦手だ。道行く人々に物珍しげに覗かれながら、
何とか笑顔を見せ続け、時折、絵描きの女性と片言の英語で会話
しつつ、遂に絵は完成した。一見しての感想。似てると言えば似
てるが、眉は太いし、口元はアヒルっぽいいし、何やら怪しげな東
洋人風。以前に後輩の女の子が書いてくれた似顔絵とは随分違つ
それにしても、やはり笑顔が足りないかも。丁寧に礼を言つてチ
ップをはずむ。

似顔絵を手にデザートパッセージを後にして、ホテル・モンテ
カルロへ向かった。旅の仲間の男性陣、K氏とI君と一緒に或
るショーを観に行く約束をしていたのだ。その送迎バスがモンテ
カルロに停まるらしく、そこでモンテカルロのカジノで待ち合わ
せをする事になっていた。早めの時間に着いて手持ち無沙汰な自
分は、手近なスロットマシンで暇潰しを始め、暇だけでなく約
五十ドルを吸い込まれる。

時間になって集まった三人でバスが来るのを待った。だが、様々
なバスが来ても、目的のバスは来ない。全く来ない。言い出しつ
べのK氏が以前に来た時は間違いなくここに来たらしいが、そ
の後の事情で変わったのかもしれない。暫く待っても来ないので、

諦める事にした。無計画な徘徊に慣れている自分は別に不機嫌にもならない。結局、そこで三人は別行動に戻る事にした。ギャンブラーな他の二人はカジノへ行くらしかったが、自分は秘かに明日の計画もあつたので辺りを散歩した後、スーパーで友人用の土産のチョコレートと夜食用のプレッツェルを買ってホテルへ戻る。

一人戻ってみれば、部屋の主な照明である机上のランプが点かない。スイッチを何度押しても、うんとすんともた。電球が切れたらしい。困った。一人部屋なら、その他の照明の光で我慢もするが、いずれ二人も帰ってくる。旅行用の英会話集を取り出して、この場合の言い方を調べ、フロントへ電話した。若干の遣り取りをしつつ、何とか通じたらしく、係の者が来てくれると言つ。テレビを観ながら待つ事にする。待つ。来ない。アメリカのサーピスは、こんなもの。そう思って、待つ。やっぱり来ない。もう一回、電話をかけた方がいいだろうか。そう思い始めた頃、来た。扉を開けるなり、ヒスパニック系の女性職員は人口脇のスイッチを押して、点かないのを確かめ、机上のランプに直行して中をいじった。電球は替えない。また、スイッチを押す。

点いた。

？

狐につままれた気分の自分を笑って見返し、彼女は去っていった。どうやら、ランプ本体のスイッチが切れていたらしい。掃除が何かで触れてしまっていたのだろう。恥ずかしかったら、あり

やしない。全く、もう。

気を取り直して、自分の海外旅行では定番のテレビ観賞だ。次々とチャンネルを変えた結果、アニメ専門チャンネルに落ち着く。壁に「女人禁制」と書かれた部屋に座る妙な老仙人の奇天烈な行動やら何やら、日本では見た事もないセンスの番組が結構ある。中でも惹かれたのは、『ハービー・バードマン』である。最初に題名と共に仮面姿で背中に翼の生えた屈強な男性が出てきた時は、所謂、ヒーローものだろうと思つて観始めた。ところが、話が始めれば、いかにもコミカルな感じの熊が自分の巣らしき洞穴で人間風に寛いでいる。

？

ヒーローものというより、デイズ二ー的だ。場面は変わり、特殊部隊らしき一群が洞穴の様子を窺っている。

??

特殊部隊が洞穴に催涙弾を投げ込んだ。

???

その後の展開は、日本のアニメでは見た事のないものだった。熊は犯罪者として逮捕され、例の主人公らしき翼の男、ハービー・バードマンが熊の弁護士として雇われるのだ。話の中心は法廷で、弁護士であるハービー・バードマンと、いかがわしい小柄な宇宙人の如き検察との対決である。熊は自白を強要されたと言つて、ハービーは一本のビデオを証拠として提出する。映像が流れる。

白黒の実写映像だ。狭い取調室を俯瞰した構図。椅子に座らされた着ぐるみの熊を殴る取調官。

一人、ホテルの部屋で爆笑する。

結局、熊は無罪になって釈放された。

裁判社会のアメリカならではのアニメである。アメリカで見られないテレビ番組を堪能した夜だった。

こうして、ハードロックとテレビ観賞に浸ったラスベガスの第三日は終わった。

\$ ラスベガス徘徊 第四日

今日も個人別行動。一人、ホテルで迎えの車を待つ。

昨日の朝、ハードロック・カフェに行く前、ホテルの公衆電話から某ツアーの予約をしていた。ベガスに到着した日、ホテルまで案内してくれたネバダ観光の長久保さんの話で、俄然、「デスバレー国立公園」に興味を持ったのがきっかけだ。機上からも大きな白い円として見えた大塩原、バッドウォーターを見たい。電話をすると、残念ながらデスバレーのツアーは定員に達して参加できないが、「バレー・オブ・ファイア州立公園」ならばまだ申し込みはなく、参加できるらしい。一瞬の迷いの後、申し込んだ。まだ申し込みがないうるしい人気のなさや、自分の他に誰か申し込んで二名以上にならないとツアー自体が中止になるという話が気に

なる。しかし、どんなに多彩とは言えどカジノか店かしか選択肢がないとも言えるベガスの街に少し飽きていた自分は、大自然に触れたかった。昨晚、モンテカルロのカジノから公衆電話をかけ、無事に他の申し込みもあってツアーが成立し、インペリアルパレスに迎えの車が来てくれる事になったのだ。

やって来た車に乗り、他の客も別のホテルの前で拾い、途中、サブウェイで昼食用のサンドイッチを仕入れた後、いざ、「バレー・オブ・ファイア州立公園」へと向かう。ツアーのガイドはネバダ観光の十二町隆史さんこと通称トニー、客は、夫婦らしき男女が二組、学生らしき若い女性一人組、そして自分の合計八人だ。女性一人組のうちの一人、Eさん（トニーさんが話しかけていた時に知った）は、結構、自分のタイプだ。ガイドのトニーさんは場を盛り上げようと何かとギャグを交えつつ喋り続けるが、皆の反応のなさと言ったら、もう、リアクション薄のポーカーフェイスで有名な自分でさえ、トニーさんが可哀想に思えてくる有様。夫婦組は新婚らしいので話しかけにくいし、女性一人組も若いだけに話せるかどうか。先行きが少し不安になる。

ラスベガス市街から車で一時間程度の距離にある「バレー・オブ・ファイア州立公園」は、「火の谷」という名に示される如く、千年以上も前からの赤い岩や砂の堆積と浸食で造られた奇観が楽しめる場所だ。ラスベガス近辺では有名なグランドキャニオン国立公園やザイオン国立公園に類する、所謂、アメリカ西部特有の

赤茶けた雄大な土地である。

今回のツアーの最初の見せ場、ピーハイブに着いた。その名のとおり、蜂の巣に見えなくもない、人の身長の数倍はある巨岩が鎮座している。他の客が近辺でおとなしく写真を撮っているのも構わず、一人で外れて歩き出した。指定の時間までに車に戻れて、ガイドと自然に迷惑さえかけなければ、後は自由だ。ここが名所と言われた所だけ見て写真に撮るなら、ガイドブックの確認でしかない。折角の大自然、自分以外の人影がない風景も見たかった。つくづく人間嫌いな一人旅向きの人だと思う。わざわざ、他の人の目からは岩陰になる場所に入り、赤茶けた岩と砂、そして青空を見渡す。気持ちいい。長い間の浸食で、やたらと奇妙に穴が開いたり凸凹したりした岩を眺めていると、その穴の中で何かが動いた。

栗鼠だ。可愛らしい小さな身体にふさふさの尾が、岩の隙間を抜け、赤茶けた地面に降りて走り去っていく。一瞬の出来事。そして、これこそ旅の醍醐味。

車に戻って、早速、皆に報告する。一応、反応はするものの、ガイドのトニーさんを除いて、それ以上の会話は続かない。話し甲斐のない人達だ。やりきれない。ネイティブ・アメリカンが書いた象形文字が残されたアトラトル・ロック、そこから車までの帰路に頭上を悠々と飛んでいた鳥、自然に囲まれて昼食を取った後に皆で岩場を散策したホワイト・ドームス、土産屋を兼ねたピ

ジター・センター、絶景ポイントのレインボー・ピスタ、何を見ている時でも同じ。皆、黙々と観光し、写真を撮り、互いの交流はしようとしてもしない。自分だけが一人参加なので、話し相手はガイドのトニーさんだけだ。御蔭で車内では助手席に座れて、トニーさんの演出で車内に流れる西部劇映画や『スターウォーズ』の音楽を聴きながら、この世のものとは思えない見晴らしを楽しめたという得もしたが。風景は変わらないのに、音楽の有無や種類で印象が変わるのを発見する。

トニーさんが気を利かせて記念写真を撮ったり、何かと話しかけたりして、それなりに皆も笑顔で楽しんでいる様子だが、自分から見ると、互いの垣根は高いままで妙な緊張感がある。見た目は結構、自分のタイプだったEさんは、中でも特に喋らない。もう一人の方は、トニーさんに話しかけたり、何かと感動を口にしたりしているのに、彼女は楽しんでいるのかどうかよく分からない。反応の薄さだ。何となく言動は海外旅行慣れした様子でもある。或る意味、自分に似たタイプかもしれない。

タイプの女の子と仲良くなれると思うほど、自分もお気楽ではない。だが、相手が外国人で言葉が通じないならまだしも、日本人しかいない状況で、何故、ここまでなのか。寧ろ、これが外国人同士であれば、自分も下手な英語で苦労しつつも会話ができた気がする。折角、何かの縁で同じツアーに参加した同国人なのだから、会話を楽しみたいと思う自分が変なのか。口数が少なくて

一人旅好き、人間嫌いで非社交的だと某友人に怒られる自分だが、ひよんな所で交流したところがある。結局、ガイドのトニーさんと話し、ラスベガス観光のピークは九月から十月で、一日百五十組くらいの日本人が来るとか聞く。

沢山の日本人が特定の関係に閉じこもったままで、他の誰とも大して話す事なく、名所の写真だけ撮りまくって帰るのかと思うと、馬鹿馬鹿しくなる。一時期、話題になったサイコ・サスペンス映画『セブン』のラストシーンが撮られたという場所を横目に、アメリカの大自然と日本人の閉鎖性を思う。そして、この大自然も、かつては核実験に使われ、今も軍の基地が設けられて、空軍のヘリ、アパッチが二機、空を普通に横切っていく。

帰路、ガイドのトニーさんがネイティブ・アメリカンの御守りである「ドリーム・キャッチャー」を基にしたキーホルダーを一人に一つずつくれて、ツアーは終わった。

個別行動から再びグループに戻る。皆が集まったところ、M氏が笑いを抑え切れないといった表情「すわ、もしや」と思いきや、案の定、カジノで儲けたと言う。ゲームはルーレット。彼女のテーブルにふらり一人の男性が現れ、もう帰りの時間が迫っていて、このゲームが最後だからと、彼女に向かって、「好きな数字は？」と訊いたらしい。何やら分からず思いついた数字を答えると、男はその数に残り全額を賭け、あろう事かそれが大当たり。相当な金額を賭けていたらしく、男が大喜びするだけでは収まらず、カ

ジノの責任者まで出てきて、皆で彼女を「ラッキーガール」扱い。男は彼女に御礼だと言って七百ドル渡して帰っていったらしい。凄いで、凄いで、七百ドル。でも、M氏、それって、自分が賭けて勝ったんじゃないじゃん。しかも、聞いてみれば、その時、自分で数字を言っておきながら、その数字に彼女は全く賭けてなかったとか。なんともはや。

皆でM氏の話で盛り上がりつつ、無料ショーを見る為にホテル・リオへ向かった。ショーが始まるまでの間にパフェで夕食。ここでついに出会えたのだ。綺麗なお姉ちゃんやカジノ大儲けではない。甘いチョコレート・ケーキだ。ラスベガスに来てからというもの、ほぼ毎日、アメリカらしい激甘チョコレート・ケーキを求め続けてきた自分は、漸くここでそれにあついたのである。一口食べただけで、そのごっつりした重たい甘さが舌に纏わりつく。これだ。警告を言えば、もっと砂糖菓子めいたジャリつとした違和感があれば最高ののだが、かなり理想に近い品のない甘さである。周りが一口食べてうんざりする甘さに、一人自分は酔い痴れる。我ながら妙な味覚だ。幼児体験は恐ろしい。

その後、無料ショー、マスカレードショー・イン・ザ・スカイを見物。ホテルのカジノフロア上約四メートルの空中に気球やら蒸気船が現れ、その上でダンサーが踊る。ダンサーの一人は観客にネットレスを投げ、それを受け取れると幸運が得られるらしい。ショーが始まる前、カジノの一角で上半身裸の男性が女性客と記

念撮影をし、彼女達にそのネックレスをあげていた。自分達は我らが女性陣二人を行かせる事にする。最初は渋っていたものの、結局、行った二人はマツチョマンを挟んで、大胸筋に手まで置いて記念撮影。残る男性陣は、それを二階から眺めて盛り上がる。暫くして、シヨールが始まった。皆がネックレスを投げてもらおうと両手を振る。しかし、自分は振らない。かっこつけてるつもりはない。単に興味湧かないのだ。皆が盛り上がるのは、それはそれで結構だが、自分はその気になれない。天井から吊るされた乗り物の上で踊る女性が、客に向かって次々とネックレスを投げる。女子供優先で、自分達の如き男性陣には気付いても、もったいぶった表情をして中々、投げない。我らが観光案内人のK○氏曰く、諦めて投げるまで手を振るんだ。その熱意に感心しつつ、まるで猿山で人間が投げる餌を待つ猿の様で、踊り子に馬鹿にされている気分になるのは自分の被害妄想だろうか。結局、全く手を振らなかった自分を除く全員がネックレスを受け取って、シヨールは終わった。

続いて、カジノ脇のバーで繰り広げられるジャグリングを見た後、ストリップへ戻り、ラスベガス、最後の夜の自由行動へ。

皆が各々、好みのカジノへと散っていく中、自分は早々とインペリアルパレスへ帰る。とは言え、夜は長い。来る前は、もつとK○氏にカジノを連れ回されると予想していたので、やたらと金が余っている。無駄遣いをする必要もないが、必要以上に儉約し

て楽しまないのも馬鹿馬鹿しい。

折角だからと思い、百ドルほど持って、ホテルのカジノで再びスロットに挑戦する。今更、ルーレットやら何やらでルールに頭を悩ませたりするのも面倒臭い。手っ取り早くスツて、さつさと寝よう、くらしいの気持ちで金を注ぎ込んだ。まるで賭け事を楽しんでいとは思えない、やる気のなさで機械的にボタンを押し続け、金はどんどん吸い込まれていく。アツと言う間に五十ドル、百ドル。これで終わりだな、と思った矢先、いきなりの当たり！一桁になっていた残額が目の前でグングン増えて、三桁に。

百五十倍！

今日、注ぎ込んだ百ドルを一気に取り返した上に、昨晚、モンテカルロでスツた五十ドルを取り返すまで残り十ドル。どうしようか迷った。深夜十二時まで残り数分。いずれにしろ十二時で切り上げようと思っていた。残り数分。とりあえず、十二時までやってみよう。そう決めて、再びボタンを押す。世の中、そう上手くはいかない。取り戻した筈の金は、またも次々と吸い込まれていく。「こりゃ、駄目だな」と思った時だ。またも、当たり！

百五十倍！

人をからかう様に再び数字は増え続け、遂にモンテカルロの五十ドルまで取り戻して、一ドルだけ越えた。一ドルだけ。何とも中途半端な人を見た当たりだ。もつ十二時近い。その一ドルで、一回だけボタンを押す。

スロツトが回る。

来るか？ 三度目の正直。

来るか？ 最後の夜の大勝利。

あつさり消えた。

これで、連日累計プラス・マイナス・ゼロ。正確すぎるくらいの勝ち負けなしで十二時を迎えた。撤退決定。

勝ちもせず、負けもせず、でも、一応、当たりも経験するという遊び方が、如何にも自分の性格に合っている様で、面白くもあつまらなくもあり。複雑な気分で部屋に帰って、他の二人を待たずに、さつさと寝た。

こうして、大自然に遊び、カジノに遊ばれたラスベガスの第四日は終わった。

\$ ラスベガス徘徊 第五日

最終日の朝。今日は帰るだけ。同室の男二人はカジノ三昧した挙句、戻ってきて、ほんの少ししか寝ておらず、とても眠そう。既に宴の後といった感だ。一方、自分の旅はまだ終わっていない。初日に出迎えに来てくれた長久保さんにまた会えるだろうか、そんな秘かな期待をしていた。会ったら、どんな話をしようか。そんな事を考えてみる。

到着時と同じくホテルの下に集まった自分達は、迎えの車の到

着を待ちながら、昨晩の各々のカジノの戦績を披露する。少なくとも昨晩限りでは、皆、負けはなかったらしい。M氏が他人の賭けで儲けたのを除けば、大勝ちも大負けもなし。

迎えの車がやって来た。

乗ってきたのは、長久保さんではなかった。

がっかり。多分、他の仕事に行っているのだろう。

皆の荷物を積み込む時、またもや旅行会社の人に、「身軽ですね」と言われる。自分は土産もそれほど買ってないので、荷物の大きさは変わらない。相変わらず国内旅行でも良さそうな状態だ。いつもこの調子だから、スーツケースを買おうと思った事はなかった。

荷物の積み込みを終え、いざ、自分が最初に車に乗り込もつとした時だ。

後部座席に見覚えのある顔が。

長久保さんではない。見覚えのある顔が二つ。

昨日、州立公園のツアーで一緒だった若い女の子二人だ。

「おはようございます」

挨拶すると、タイプの子のEさんの方が小声で挨拶を返してくれた。それだけでも、ちよつと嬉しい。他の仲間がいなければ、もう少し話しかけたかもしれないが、全く親しくなっていない人に、他の人もいる中で話しかける気になれず、それっきり。後は仲間五人の会話になる。

空港に着いて、車から荷物を下ろす時に見ると、Eさんの荷物も自分と同様、身軽だ。女性で荷物の量が少ないのは、やはり旅慣れているのだろう。そして、彼女は手荷物の肩掛け鞆に、昨日、トニーさんがくれたキーホルダーをつけていた。貰った時は何も言っていなかったのに、意外な感じがする。それほど言動には出さなかったが、彼女は彼女なりに楽しんでいたらしい。そんなつまらない所に愛らしさを覚えたりする。

そんな話題で話しかけたいと思いつつ、どうしても機会は齟齬、旅の仲間の目も気になって、結局、一言も会話できず、そのまま別れてしまった。今、思えば、この旅で最も悔いが残っている事かもしれない。

無事に帰路についた途端、カジノ夜更かしの男二人は即時、睡魔に撃沈される。自分がいるからいいようなものの、海外でどうも無防備に空港のベンチで眠るのもどうかという気もする。機内に入ってから、男二人は殆ど夢の中。女性陣は映画を観たり、ゲームをしたり。自分は一人、ベガスで買った洋書『American English』を読む。今更言つまでもないが英語は得意ではない。喋るのは勿論、読むのも。和訳しろと言われれば困る。ただ、サスペンス小説ならば、細かい訳は分からなくても、大筋が理解できれば問題ない。これが、結構、面白い。サスペンス小説としてのスリリングではなく、期待通り、日本の描写が、息子の不審な死を調べに来日した大学教授が主人公で、所々、妙な「日本」が出てき

つつも、日本人は気にもしない部分への来日外国人ならではの感想が興味深く、機内で読み続ける。流石に自分も旅の疲れがあるので夜通し読み続けて終えるまではいかなかったが、深く考えずに衝動買いた本にしては、自分への中々の良い土産になった。暫く楽しめそうだ。

成田空港へ到着。皆、疲れ切っているからか特段の締めもなく、流れ解散。

前回の海外旅行は、一応、故郷にして原点に帰る意味もあった。ニューヨークだったが、今回は純粹に観光だった。何の期待もなく、単に誰かと海外旅行に行けるといっだけの。感じたのは、アメリカという国の大きさ、無駄の多さ。ラスベガス経験者の同僚達が事前に激賞していた街は、自分にとっては殆ど「まがいもの」の街でしかなかった。使い勝手を無視して無闇に大きな建物、無駄に多い料理。そして、それらは細部において全く芸がない。一見して塵物だと分かる装飾、一口食べて飽きる味付け。この街に費やされるコストやエネルギーは、どれほどのものか。オサマ・ビンラディンらがアメリカを退廃的だとして、攻撃する気が分からないでもない。第三世界で多くの人々が貧困に苦しんでいる時、この街の有様を見たら、どう思うだろうか。

羨ましさ？ 恨めしさ？

確かにラスベガスは楽しい街かもしれない。カジノもショーも。だが、今回の旅で自分が一番楽しかったのは、「バレー・オブ・

ファイア州立公園」の小さな栗鼠と真つ青な空だ。

成田空港から京成線の電車に揺られて、ちまちました日本の町を走り抜けながら、そう思った。

こうして、ラスベガスの徘徊は終わった。